

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年6月1日発行

(毎月1回1日発行)

第17巻第6号 通巻192号

6 月号

2022



弥生三月プロムナードの杉の丈

さまざまな音の生まれぬる芽吹山

人ごゑの突き抜けてゆく竹の秋

虚子の忌を明日に草加の舟番所

桜さくら桜さくらと川伝ひ

寺に飽き花にも飽きて蕎麦処

囀りのひととき激し榎林

存分に暮れあかあかと花篝

壺焼きの火を継ぎ足して放哉忌

焼畑の一部始終を見てをりぬ

一仏浄土ちりぎはの花うつくしき

菩提寺の八重のさくらの遅れ咲き

雀の鉄砲抜き一徹を通しけり

一仏浄土

主宰作品

増成栗人

柏餅

副主宰作品

谷口摩耶

子の触れし満天星の花鳴りどほし

数式は呪文のごとし春の雨

花過ぎの町を鎮める夜の雨

蝶とゐる夫の車を待つ間

苺ケーキゆるゆると子が運びくる

控へ目な満開であり木瓜の花

芍薬の固き蕾のほぐれ初む

コロナ禍の育ち過ぎたる金魚かな

あかあかと栃の花咲く空であり

柏餅あらためて見る柏の葉

「大門岡替」という老舗の和菓子屋で柏餅を買って来ました。夕方の売り切れ寸前だったので、その日は漉し餡しか無かったけれど、飽も餅も素晴らしく、他の種類も食べたくなり、次の日は午前中に、つぶ餡と味噌餡を買ってきてもらいました。つぶ餡は蓬餅に包まれ、味噌餡は白味噌で、うっすら黄色の餅に包まれていました。三種類とも本当に美味しくて、夫と二人で柏餅を堪能した連休となりました。

俳 作品抄

会員選

噴煙と見紛ふ阿蘇の野焼きかな
気が付けばいつも鼻うた山笑ふ
歯切れよき白菜漬の塩かげん
片言の手話使ひけり春の虹
寄鍋の野菜を避ける子らの箸

本田 豊明
北城 美佐
山田 世都子
綾戸 五十枝
中川 幸恵

谷口摩耶 選

同人選

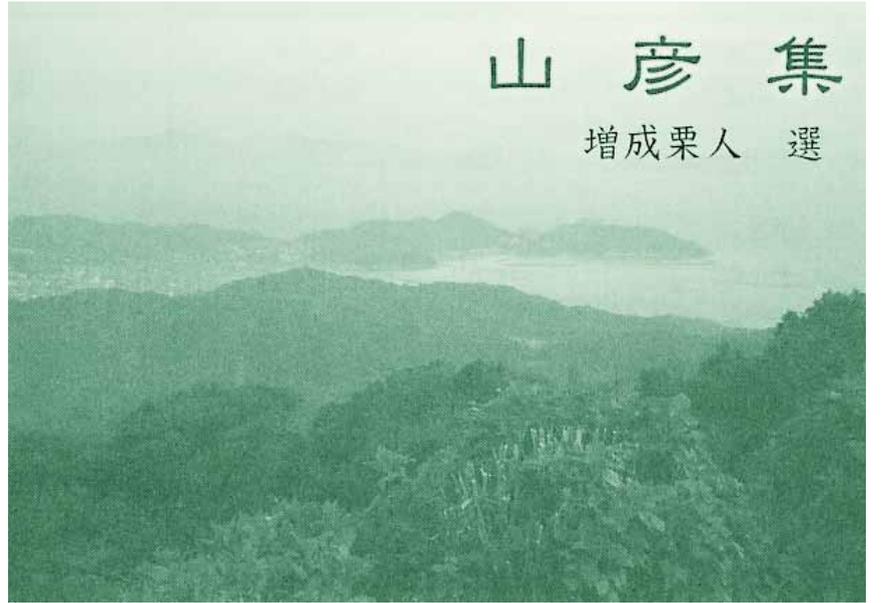
みちのくの入江に春の来てゐたる
春の灯のひとつに母の読書灯
芽吹く木に仏の眉のやうな月
少年の顔となりきる卒業子
店頭の小切絵行灯雛の日
巻尺のしゅわつと締まり弥生寒
梅の白風の襖を受けし白
札幌河岸たんぼぼの丈伸び切つて
啓蟄の樹々百態の目覚めやう
裸木となりて樹齢を偽らず
鴨引くや香月泰男の絵具箱

山崎 正子
足立 枝里
北村 操
伊藤 真代
田邑 利宏
守屋 久江
井上 つぐみ
水沢 和世
五十嵐 敏子
守屋 吉郎
鈴木 崇

増成栗人 選

山彦集

増成栗人 選



東京 足立 枝里

花時の出汁の香満つる京町家
果実酒に澀溜まりゆく遅日かな
黒板に数式並ぶ木の芽風
風船の頭打ち合ひ売られけり
母国語で歌ふ聖歌よ花ミモザ
春の灯のひとつに母の読書灯

流山 田邑 利宏

店頭の切絵行灯雛の日
うさぎ雛飾る下駄屋と金物屋
杜のアトリエ玻璃越しの吊し雛
連れ立つて味醂の街の雛巡り
下総に一茶と双樹春の雪
新選組の本陣跡の紅椿

横須賀 鈴木 崇

麦青む空一点を指すやうに
朧夜や話の弾むブックカフェ
掛かりたる古書肆の梯子霾れり
鴨引くや香月泰男の絵具箱
気まぐれに乗りたるバスよ梅の白
弁当を提げ川沿ひの木の芽晴

仙台 佐藤 あさ子

路の臺摘むに迷ひのなかりけり
髪詰めにくく蒲公英の道をゆく
海見ゆる丘へ初音を聴きにゆく
震災の日のことをふと春の星
朝餉にと四万十川の石蓴汁^{あをさ}
納骨の濟み白梅のほつほつと

船橋 北村 操

蓬摘む日ざしは母のまなざしに
芽吹く木に仏の眉のやうな月
引鴨や沼にそぼそぼと雨
さざなみの果のひかりの浅蜷舟
蛙塗やあふれるほどの日が差して
おぼろ夜の島ゆく船の泛きあがる

松戸 山岸 明子

学園通り葉のつぎつぎと
春光の溢るる日なり汀子逝く
春よ春一茶の庵の賑はひよ
万華鏡商ふ老舗春がくる
燈師といふ店のあり月朧
余寒なほセコイアの幹隆々と

豊川 水谷 はや子

久に来し友よりの文花の雨
蜂ぶんぶん菜園に日の溢れある
笑ふ山ありマネキンの衣替へ
川原の小石踏む音か囀りか
野へ出でよ待ちくたびれし春がくる
春の雪たわわにポストまでの道

豊橋 伊藤 真代

少年の顔となりきる卒業子
ポニーテールの子が蝶々を追うてゆく
夕づきてはくれんの白ことさららに
櫂の芽つんつん空へ空へ伸ぶ
トリミングサロンへ犬とゆく朧
縁先の沓脱ぎ石に初蛙

柏 井上 つぐみ

音もなくふくろふ闇へ闇へ飛ぶ
メタセコイアの静かな鼓動春立てり
梅の白風の襖を受けし白
白梅を透かして空の深きこと
いつぽんに気付き土筆のいちめん
退院の母待つ部屋の花シンス

羽音集

谷口摩耶 選



稲城 本田豊明

札幌 北城美佐

豊橋 山田世都子

松戸 綾戸五十枝

微睡みて待つ搭乗や旅うらら
げんげ田の色は無闇に懐かしく
きみあらばこそ満開の桜かな
花の雨散るも残るも霧の中
噴煙と見紛ふ阿蘇の野焼きかな
気が付けばいつも鼻うた山笑ふ
部屋中に日溜り作る花ミモザ
子の部屋を客間に仕立て春来る
豆皿におかず並べて春の昼
あをによし奈良公園に春の雨
荃立の隣の畑のブロッコリー
弥生三月駅弁買うて旅気分
歯切れよき白菜漬の塩かげん
菜の花の風の生まるる土手の道
手に余るほどの花束スイトピー
片言の手話使ひけり春の虹
日脚伸びサプリメントの粒二つ
朧月ぶつきらぼうな文届く
焙りしは潮のかをりの蒸鱈
カラメルほどよき苦味水温む

会津 中川幸恵

習志野 野村昌代

札幌 上杉 馨

喜多方 福地タカ

Vの字を崩すことなく鳥帰る
我の足見て大根を選ぶ子ら
亡き母の自転車のこる冬茜
轆をなでる幼ナの優しさよ
寄鍋の野菜を避ける子らの箸
ひひなの日手書きラベルのジャムの瓶
雛の家今宵はカレーライスかな
奈良行きの先頭輜車春日差す
ジオラマの江戸の町なみ涅槃かな
橋の影自転車の影桜どき
屋根の雪どどんと落ちて家揺らぐ
雪籠る隣の窓に灯がともる
雪解水の旅の初めのひとしづく
雪捨つる曜日知らせ届きけり
木の根開き結婚話のさりげなく
祖迎ふ彼岸供への餅焼いて
思ひ出の一番にある彼岸獅子
花いちもんめ浮かれてをれば戻り雪
雪壁を弾く下枝猫やなぎ
待春の餅を搗きしと持ち呉れし

豊川 三浦信行

柏 高橋 詩

流山 長沢ひろり

豊橋 鈴木容子

貽蕩に支配されをり自由人
リード曳く犬の背筋の伸びて春
夕闇に部屋より溢る春の灯よ
高架橋ハンドル揺らす春一番
気に入りの靴下に穴春浅し
置葉の紙風船を母とつく
書架に置く小さな雛のオルゴール
庭先にやうやく赤き牡丹の芽
心做しか背伸びして山笑ひけり
川の面を梳きゆく日差し雲雀鳴く
濡縁の猫の眼差し春近し
節分の豆靴底に残る朝
朝の風マルシェに並ぶ蜜柑かな
松過ぎの渚に拾ふ白き石
寒椿落ちたるあとの静寂かな
小さき手の落とさぬやうに雛飾る
春光や大人の塗り絵飾りをり
石亀の首に投げ銭春浅し
弁天の島へ栈橋春の空
菜の花の眩しきほどの日を返す



「横浜②・ハマに歴史あり」

鈴木 崇

横浜開港資料館中庭に「玉楠」と呼ばれる木がある。

種類はタブノキなのだが、黒船来航の際、応接所となったこの場所にその時からあったもの。艦隊の随行画家ハイネによるペリー一行のヨコハマ上陸図にもこの「玉楠」が描かれている。

慶応二年の大火と関東大震災という二度の大きな被害を受けたが、今も緑の葉を茂らせる横浜開港の生き証人である。

横浜開港資料館は、大さん橋入り口近くにあり、日米和親条約締結の地でもある。建物は旧イギリス領事館。

日本大通りをはさんで向かいには神奈川県庁がそびえる。帝冠様式の威容はのちの地方庁舎建築にも大きな影響を与えたとされる。屋上部分の重厚な塔は「キングの塔」の愛称をもつ。

庁舎内の見学日に訪れたことがあるが、「キングの塔」を間近で見ることができたのは貴重だった。

文明開化の地・横浜には、さまざまな発祥の地がある。

日刊新聞が初めて発刊されたことから、日本大通りに日本新聞博物館がある。馬車道には下岡運杖頭彰碑がある。下岡は横浜で初めての写真館を開業した人物だ。

馬車道に瓦斯燈ともる鳶紅葉

古賀まり子

作者は横浜生まれの俳人。馬車道は近代的街路樹発祥の地とされている。異国情緒漂う横浜のクラシカルな趣を捉えているのだ。

JR 関内北口駅前、高速道路に架かる歩道橋の真ん中に「吉田橋関門跡」の碑が建っている。吉田橋は開港場と吉田新田を結ぶ重要な橋だった。警備のために幕府は橋のたもとに関門を設け、馬車道側を「関内」「伊勢佐木町側を「関外」と呼ぶようになった。

現在、絶え間なく車が流れゆく高速道路

は、かつて大岡川分流の運河であったのだ。

何度となく渡っている歩道橋だが、それが実際に川に架かる橋だったこと、内と外を分かつ場所だったことを意識したことはほとんどなかった。

横浜市役所は、関内駅南口から大岡川の河口付近に庁舎が移った。大岡川に架かる弁天橋からは、川の右手に新庁舎、左手にランドマークタワーを挟んでみなどみらいのビル群が一望できる。

そのビル群が描くスカイラインの前を、新しく開業した都市型ロープウェイのゴンドラがゆっくり動いていく。

変わりゆく横浜の新たな景観である。



横浜・神奈川県庁

票庵閑話 48



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>